

自らを賭けるアリーナ

いることだ。

小学校の校庭でおこなわれた結婚式後のギン・リアン



「フィールドで
考える

タイの うたげと選挙

高城 玲 (たかぎ りょう)
国立民族学博物館機関研究員

夜のとぼりが下りるころ、人影が三々五々に蠢き出した。まぎれる闇を待つていたのか、定かではない。ただ、皆どこか楽しげだ。タイ中部のとある農村、ときはまさに選挙戦まったくなか、投票日まで残りあと一週間だった。彼らが集まる先は、村の小さな雑貨屋。そこで近隣の人ひとを集めたうたげが開かれるのだ。それも、票をえるための選挙運動の一環としてだといふ。

うたげをタイ語では、ギン・リアンという。個人が催す簡単なバー・ティーから儀礼の後におこなわれるものまで、ギン・リアンは多種多様だ。結婚式後におこなわれるギン・リアンなど、小学校の校庭に八人掛けの円卓を一〇〇卓も並べるほどの規模になることがある。他方、毎月二回おこなわれる宝くじで、たった三〇バーツ(当時約一〇〇円弱)でも儲けが出た場合、当選の幸運をえた者は、わずかな儲けの半分程をジユース代に費やして周囲におこらなければならぬ。これも同様にギン・リアンと称される。ギン・リアンといふ言葉は、その指示する対象と規模をこのように自在に変えていく。

ただし、変わらないこともある。それは、食べ物や飲み物をおこり、おこられる一連のやりとりが、農民の大きな楽しみであるだけでなく、彼らの生活に深くかかわって

とりわけ選挙運動期間中のギン・リアンは重要な。農民の生活を文字通り左右するからだ。自分に近い筋の候補者が当選すれば、家の前の赤土の道が数ヵ月後には舗装されるかもしれない。そういう現実的で切実な問題につながるのだ。だからこそ、この場のギン・リアンは自らをどの候補者に賭けるのかというアリーナとなる。

心躍る喧噪の場

もちろん、法律上、候補者が有権者である農民に飲食物を与えることはタイでも御法度だ。しかし、候補者主催のギン・リアンは、わたしが調査していた一九九〇年代後半、あたりまえの光景として農村にしつくりなじんでいた。

灼熱の太陽の下での農作業を終え、夜の八時を過ぎたころ、わずかな涼風に身をゆだねながら、即席のうたげの会場となつた雑貨屋に入びとが集まつてくる。彼らが楽しげなのは、自分の懐を痛めることなく食事や酒を囲んで、近隣の人たち大勢と居合わせることができるからだ。そして、わいわいがやがやとおしゃべりに興じることができるからだろう。

ここでは、即興の冗談や歌も満載だ。翌朝早くの農作業に備えて寝支度を整えていた農民も、ギン・リアンのざわめきをど

これからとも聞くと、いそいそと会場に足を向ける。そつやつて寝巻姿でやつてきた若い女性に、オジサン連中は「ここに来るのは着飾ってきたのか」と冗談を投げかけ、周りは笑いつつまれたりもする。また、太鼓やコップを鳴り物として歌や踊りや合いの手で、その場が一気に盛り上がるよりも稀ではない。そんな心躍る喧噪の場となる。

しかし、このような祝祭的な雰囲気の一方で、やはりこのうたげは選挙運動のまつただなかにある。どんどん騒ぎのとさくさに紛れ秩序が薄められる完全な無礼講という説にはいかず、逆に、日頃あまり意識していないかった社会のかたちが目に見えて浮かび上がってくる。

「共」と「競」

ギン・リアンに集まつて手を合わせ歌い合ふ様子は、うたげといつ日本語の「手を拍ち上げ」、「歌合」、「円居」とも通じ合う。

そうした行為によって、人びとはひとつになり、渾然一体と交感し、境界が判然としないくなる。しかし選挙のギン・リアンでは、逆的に、同じ行為が差異を露呈させもある。

あるとき、選挙中のギン・リアンで即興の歌が飛び出した。主催者である候補者が、皆にのせられて、大声で歌い出したのだ。

「演／宴」と言い換えていい。

夜のとぼりのその蔭で、選挙のうたげが、共に競する社会を紡ぎ出していったのだ。

